

# ISAPH

アイサップ  
ニュースレター

第37号

# News Letter

2020年11月30日発行



写真: マラウイ ビタミンA改良品種のサツマイモ畑にて

ISAPHはラオスとマラウイの母親と  
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health





## 日本から実施する調理実習

ISAPHマラウイ 浜中 咲子

7月より、JICA（国際協力機構）草の根技術協力事業「母と子の『最初の1000日』に配慮したコミュニティ栄養改善プロジェクト」の第2期を開始しました。

第1期では、開始当初に行った活動対象地域の状況把握調査をもとに、コミュニティ菜園、養鶏活動、調理実習等、様々な活動を展開していました。第1期の終わりには、新型コロナウイルス感染症の影響により突如邦人職員が緊急退避せざるを得ないという出来事がありましたが、現状では退避前とほぼ同様に活動を行っています。第2期では第1期の活動を継続させつつ、ますます活動を充実させていければと思っています。

今回はその中でも邦人職員の退避に伴い、アプローチ方法が変化した調理実習についてご紹介します。現在ISAPHマラウイ事務所では、動画を用いて新しく導入した作物や、もともと摂取頻度の低かった食材の調理指導を村人たちに行っています。具体的には、人参、乳製品（牛乳）、茄子、ピーマン、ニンニク、大豆ミートなどを用いたレシピの紹介をしています。新しいレシピの紹介は邦人職員がマラウイに滞在している際にも現地職員に対して行っていました。邦人職員が緊急退避をした際に、この活動は止まってしまいました。しかし、マラウイが作物の収穫期に入ったことから、なんとか新しく栽培を始めた作物のレシピ紹介をしたいと思い、遠隔での調理指導を7月から開始しました。

遠隔の調理指導の手順としては3段階あります。第1段階として、日本に退避している職員が現地の食文化に受け入れられそうな料理、かつ上記の食材を使用できるレシピを話し合い、レシピ動画を作成します。

次に、できあがった動画を使用して、ISAPHマラウイ事務所の現地職員向けに月1～2回の調理実習を開催します。この調理実習では、現地とWeb会議システムを用いて繋ぎ、調理中の様子を見ながら動画ではわかりにくそうなポイントを伝えたりしています。例えば、初めてカッターチーズの調理実習を行った際には、温めた牛乳にレモン汁を入れる工程がありますが、牛乳の温度が重要になります。この工程では、牛乳を温めている鍋を映してもらい、日本から画面越しにレモン汁を入れるタイミングを伝えました。

最後に、実際に作ってみて、職員自身が美味しい・良かったと思ったレシピを、村の調理実習に取り入れています。その理由としては、日本側からのレシピはあくまでも提案なので実際に現地人である職員が受け入れてくれるということが、村人たちが新しいレシピを受け入れてくれる一つのハードルと捉えているからです。そのため、日本側から提案するレシピはあえてマラウイ側に受け入れられるか不安要素のある挑戦的なものを組み込むこともあります。現在村の調理実習で紹介されているレシピのうち、遠隔の調理指導を行ったものは、ピザ、クリームシチュー、チーズ、チーズ入りパンケーキ、シリシリ（人参を使った沖縄料理）などがあります。

SNSを通じて、マラウイの人々が日本でも食べられている料理を美味しくように食べている写真が送られてくると、距離は離れていますがとても身近に感じます。



村で作ったピザと、それにかぶりつく子ども



現地職員のタブレットでレシピ動画をみる村人たち



村で作ったクリームシチュー、チーズ、人参のトマト煮込

## コミュニティが協力して、 村に医療施設を造る

ISAPHマラウイ 山本 作真

いま住んでいる地域に医療施設がひとつもなく、他の地域への交通機関も全くないとしたら、どんな暮らしになるでしょう。マラウイでは、決して少なくない人々がそのような土地で暮らしています。

マラウイの公的な医療機関は、県にひとつずつある県病院、県内各地域にあるヘルスセンター、そして末端のヘルスポストからなります。ヘルスポストは集落に密着した診療所にあたる施設で、5歳未満児の乳幼児健診や予防接種、低栄養児の発見、保健指導や健康教育など、地域の保健医療サービスを無料で提供する重要な拠点となっています。

しかし、ヘルスポストと呼ばれながらも建物自体がなく、健診も予防接種も屋外で行っている地域が少なからずあります。アフリカの厳しい気候の中、雨季には土砂降り、乾季には強い日差しの中、わずかな木陰にぎゅうぎゅう詰め待たなくてはなりません。

今回、非営利団体「そっと応援する会」様からのご支援をいただき、ISAPHの活動地域内で、このヘルスポストを建設する機会を得ました。

現在ISAPHが活動する地域の中で、ヘルスセンターまでの距離、雨季になると川ができて道が寸断されてしまう地理的条件、対象人口、担当の保健ワーカーが常駐していないなどの条件を勘案し、セント・アンス・ヘルスポスト地域での建設を決めました。

レンガを焼き、積み上げて建物にする作業は地域の住民によって行われます。村の人にとって、ヘルスポストを建設するのは初めてのこと。ヘルスポストがどんな建物か、他の地域で見たことも少ないためイメー



コミュニティ自身でヘルスポストを建設する様子

ジがつきにくく、建設プランや作業の過程で思い違ひが多くありました。また、村では人手が少なく、建設中は村の行事や農作業、新型コロナウイルス感染症の流行による影響を受けてスムーズに進まない時期もありました。その度に、活動のパートナーである県保健局の公衆衛生部長に力を借りて、地域への指示を行っていきました。

2020年9月、残っていた仕上げの作業が終わり、ついにヘルスポストが完成しました。今では、強い日差しや大雨の日でも、快適に乳幼児健診を受けられるようになりました。この地域を担当する保健ワーカーのカタヅカ氏は、「ヘルスポストが建ち、これまでより乳幼児健診の参加者が増えました。低体重児を見つけることも容易になり、健康的に育つ子どもが増えたように思います。また、乳幼児健診に来た母親や子どもたちは、建設されたヘルスポストでゆっくり椅子に座ることができるようになりました」と語っています。

完成までには困難もありましたが、ヘルスポスト建設という目標がコミュニティ内でも共有され、協力体制が少しずつ強まっていたように感じました。これは地域コミュニティにとっても良い機会になったと思います。今では乳幼児健診だけでなく、村の様々な会議が建設されたヘルスポストで行われています。ヘルスポストは、これからこの村の憩いの場として、長期にわたり住民に愛されると思います。

「そっと応援する会」

<https://kirikiriouen.jimdofree.com>



ヘルスポスト建設以前、屋外で実施されていた乳幼児健診



完成したセント・アンス・ヘルスポストで乳幼児健診を実施する、保健ワーカーのカタヅカ氏

地域保健ワーカーからの施設完成へのコメント動画は、YouTubeのISAPHチャンネルで観ることができます。

<https://youtu.be/7ORIG-olixs>



## 新しいプロジェクトの調印式を オンラインで実施

ISAPHラオス 石塚 貴章

ISAPHラオス事務所では、10月13日にサイブートン郡でのプロジェクトのフェーズ2のスタートに伴う調印式を、カウンターパートのカムアン県保健局とともに外務省、保健省等の職員を招き実施しました。新プロジェクトの実施期間は2020年10月から2023年9月の3カ年です。

フェーズ1と異なる点は主に2つあります。1点目は、母子保健活動の対象地域が、フェーズ1の3村に加え、ナノイヘルスセンターの管轄地域である10村を対象村に増やしたことです。既存3村は、本フェーズにおいて直接の介入はせず郡保健局のアウトリーチ活動を通して、モニタリングを行います。また、新たな対象村に向けて、今後現地の情報収集を行い、住民の健康に対する行動変容を促すための戦略を練っていきます。2点目は、昆虫養殖支援活動をはじめとする村落開発活動を取り入れたことにあります。2017年より昆虫養殖事業を既存3村16世帯に対して行っておりますが、本フェーズでは養殖世帯数のさらなる拡大とゾウムシ以外にエリサンやバッタの養殖にも挑戦していきます。また、この活動はJICA草の根技術協力事業パートナー型のスキームを用いるもので、引き続き食用昆虫科学研究会の佐伯専門家とともに実施していきます。

カムアン県保健局で開催した調印式は、本来であれば邦人職員も会場に同席するはずでしたが、新型コロナウイルス感染症の影響によりラオスへの入国ができないため、残念ながらオンラインでの出席となりました。現地に邦人職員が不在となることで日本側のプレゼンスが落ちるのではないかと懸念していましたが、ISAPH側は邦人職員に加え、聖マリア病院・足立



ISAPH現地職員がラオス語-英語を通訳

先生、食用昆虫科学研究会・佐伯専門家、JICA九州・森川様、長崎大学大学院・スクタボン様（2021年1月からISAPHヘインターンシップ参加予定）と、今までであればラオスまで足を運べない方もオンラインで参加したことで、結果としてプレゼンスをアピールすることができました。

ISAPHラオス事務所では、前例にないオンライン調印式をどのように開催するのか、1カ月以上前から日本とラオス側で共に意見を出し合い、試行錯誤し、入念な準備を進めてきました。その甲斐もあり、当日は前日からの雨の影響による通信不良の不安もありましたが、何もトラブルなく成功することができました。

また、式典の中でカムアン県保健局ケンチャン局長からはISAPHの今までの功績を称えるとともに、「フェーズ2においては、さらなる栄養教育と昆虫養殖活動が重要であり、県保健局は本プロジェクトが成功するためにISAPHを技術面及び設備面においてサポートしていきます」と、ISAPHへの期待を込めた心強い言葉もあり、これからの3年間互いにサイブートン郡の母と子の健康改善のために、プロジェクトへ尽力することを誓い、調印式を締めくくりました。



ISAPH東京事務所からは5名が参加



和やかに調印式が完了

# 新10村の母子保健サービス 利用状況について

ISAPHラオス 安東 久雄

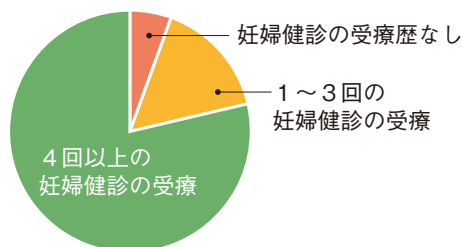
2020年10月よりMOU（Memorandum of Understanding：了解覚書）フェーズ2がスタートし、事業地が3村から13村に拡大しました。新しく増えた10村はサイブートン郡ナノイヘルスセンターが管轄する人口3,000人規模の地域です。2018年にヘルスセンターから聞き取りを行った際には「住民に母子保健サービスを利用するようにアドバイスしても妊婦健診や施設分娩を利用してくれない。生後6カ月までは母乳以外をあげないように話しても守ってくれない」という報告を受けていました。当時の指標を見ると、妊婦健診の受療率が低く、自宅分娩率が高いこと、子どもたちは医療サービスを受けることなく、1歳になる前に村の中で亡くなっていることがわかりました。

そこで、私たちは「母子保健サービスの利用（妊産婦健診/施設分娩）及び子どもの栄養に関連する生活行動（完全母乳栄養）を強化する」ことを目標に掲げ、プロジェクトをスタートしました。行動変容を促すための戦略として、地域住民が行動変容ステージモデル（無関心期→関心期→準備期→実行期→維持期）のどの位置にいるのか把握する必要があると考えました。また、妊産婦健診/施設分娩と完全母乳栄養を実施している人と実施していない人に聞き取り調査を行い、行動変容の促進要因と障害要因を明らかにしたいと考えました。紙面の関係上、このニュースレターでは、聞き取り調査の結果の一部として妊婦健診および施設分娩の利用状況に関してご報告したいと思います。

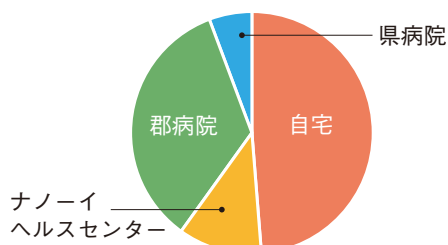
対象の10村で合計91人のお母さんたちから回答を得ることができました。妊婦健診と施設分娩の利用状況に関してグラフ化しましたので、まず妊婦健診の受療状況をご覧ください。約80%（72人）のお母さんたちが4回以上の妊婦健診を受療しています。全く妊婦健診を受けたことがなかったお母さんはわずか5人だけでした。妊婦健診受療の障害要因は、「ヘルスセンターまで遠く、交通手段がないことや、ヘルスセンターのスタッフを恐れていること、嫌な思いをしたことがある」でした。次に、施設分娩の利用状況を見てみましょう。約50%のお母さんが施設分娩をしています。驚くことに約4割（36人）のお母さんは、村から最も近いヘルスセンターではなく、10km以上離れている郡病院、または100km以上離れている県病院で分娩をしていることがわかりました。特に、初産婦や高齢妊娠の場合など、出産に不安を抱えているお母さんは、医療設備が充実したところで出産したいと考えているようです。その一方で、自宅分娩しているお母さんたちも約50%（44人）います。「夜間の陣痛であったため、交通手段が確保できなかったことや、病院に移動しようと思っていたら先に子どもが生まれてしまった」という回答が得られました。自宅分娩したお母さんたちの6割以上は施設分娩が推奨される理由を理解しており、次は施設分娩できるように準備すると話してくれた一方で、残りのお母さんは、施設分娩の利点を答えることができず、次回も自宅分娩を選択する可能性があります。

私たちはこのインタビュー調査から得られた情報を郡保健局やヘルスセンターの職員と共有し、地域住民の現状とニーズに基づき、お母さんたちの行動変容をサポートできるように郡保健局・ヘルスセンターの活動を支援していきたいと思っています。

妊婦健診の受療状況



施設分娩の利用状況



ISAPH現地職員によるインタビュー調査の様子

## ホームページがリニューアルオープン！



<https://isaph.jp>



日々の活動の様子や、ISAPHからの情報をわかりやすくお届けするため、ISAPHのホームページをリニューアルしました。

今回のリニューアルでは、ISAPHの国際保健医療協力にける想いや、国別・テーマ別での活動（背景や目標、成果など）が分かるページを新設しました。ISAPHが大切にしている人材育成としての“スタディツアー”や“インターン”についての情報も得やすくなりました。さらに、これまでの学術活動の実績もご紹介しています。「ホームページを見ればISAPHのことが分かる」そんな内容になっていますので、どうぞご覧ください！



そして、多くの方にISAPHの活動を知っていただくため、SNS（Instagram、Twitter、Facebook）も始めました。新鮮な活動の情報を写真や動画で発信したり、イベント情報やISAPHからのお知らせなどを、盛りだくさんご用意しております。是非フォローをお願いいたします！



[https://www.instagram.com/npo\\_isaph](https://www.instagram.com/npo_isaph)



[https://twitter.com/isaph\\_npo](https://twitter.com/isaph_npo)



<https://www.facebook.com/npo.isaph>

## 「食」でマラウイの人々を健康に

ISAPHマラウイ 浜中 咲子

4月よりISAPHマラウイ事務所の一員として着任しました、浜中咲子と申します。ISAPHへ入職前は、管理栄養士として大学病院、企業、教育機関、カフェで働いてきました。それぞれの場所で、生きるため・治療として、育つため、文化として、楽しむためと様々な表情を持つ「食」と関わってきました。

また、赴任先のマラウイには以前、青年海外協力隊として派遣され、県立病院と公立小学校で活動をしていました。公立小学校では科学の授業の一環として調理実習を行っていました。当時の活動では、主にマラウイで一般的に食べられていないレシピを紹介していましたが、その反面、マラウイの主食であるシマ（トウモロコシの粉をお湯で練ったもの）と、トマトで煮込んだおかずが好きで、赴任した当初、半年間は隣人宅で作ってもらい、毎晩一緒に食事をしていました。

現在、マラウイ事務所のプロジェクトでは、子どもたちの成長に必要なのに手に入らない食物に関して、栽培方法を指導しています。また、現地で入手できる

にもかかわらず、積極的に食べられていない食材もあります。それらの食材を利用したレシピを紹介するための調理実習を活発に行っています。

「食」は栄養改善のために、もちろん大切なものだと思いますが、ただそのためだけのものではないと思います。マラウイの食文化を尊重しつつ、美味しく・みんなで笑顔になれる「食」を、村人・現地職員たちと楽しんでいければと思っています。



協力隊当時の活動風景

## ラオス事務所着任の挨拶

ISAPHラオス 石塚 貴章

はじめまして、2020年4月にISAPHラオス事務所に着任した石塚です。新型コロナウイルス感染症の影響により、残念ながらいまだ現地入りすることは叶っていませんが、日々ラオス事務所の現地職員とのリモートで活動を進めています。私は、これまで9年間、栃木県の役所で生涯学習や農業関係等の業務に携わっていました。国際協力への道を志したのは、役所を退職し、青年海外協力隊に参加したことがきっかけです。2016年から2年間隊員としてラオスのカムアン県産業商業局で、特産品（陶芸製品、天然染織物、竹細工等）の商品改善、開発の支援をしました。そのときに、現地の人たちと活動していくなかで農村部の住民のエンパワーメントに興味を持ち、日本帰国後は栃木県の役所に戻りつつも大学院で公共政策を学び、ラオスに戻るための準備を進めました。

私がISAPHに魅力を感じたのは、コミュニティベースでの活動ができることです。住民の声が中央政府や地方政府に届きにくい現状がラオスにはあります

が、それを届けるのが外部者であるNGOの役割であると私は感じており、ISAPHラオス事務所はカムアン県で長い間活動してきた実績からラオス政府の厚い信頼があります。

2020年からは、サイブートン郡での母子保健事業フェーズ2とJICA草の根技術協力事業が始まります。新しいプロジェクトでは、ISAPHラオス事務所の今までの知見と経験を活かし、成功へ導いていけるように邁進していきます。



ラオスの人たちと記念撮影

## 最近のできごと 2020年6月～2020年9月

- 6月22日～24日 【ラオス】 食用昆虫養殖パイロット農家フォロー
- 6月22日～25日 【ラオス】 村のリボルビングファンド支援：会計業務研修を実施
- 7月9日 【マラウイ】 生後6～8カ月児を持つ保護者を対象に、離乳食の調理実習を開始
- 7月17日 【マラウイ】 現地職員を対象に、Web会議システムを利用した遠隔での調理実習を開始
- 7月28日 【ラオス】 アウトリーチ活動の関係者を表敬訪問、郡保健局において4半期会議に参加
- 7月28日～30日 【ラオス】 食用昆虫養殖パイロット農家フォロー
- 7月29日～31日 【ラオス】 村のリボルビングファンド支援：超過債務対応研修を実施
- 8月7日 【ラオス】 カムアン県保健局において6カ月会議に参加
- 8月25日 【ラオス】 ヘルスセンターの母子保健サービス機能に関する情報収集を実施
- 8月25日～27日 【ラオス】 食用昆虫養殖パイロット農家フォロー
- 8月26日～28日 【ラオス】 村のリボルビングファンド支援：年次会議を実施
- 9月1日 【マラウイ】 建設を支援していたセント・アンス・ヘルスポストが完成、健診・診療所として運用を開始
- 9月7日～11日 【ラオス】 住民の健康希求行動に関するインタビュー調査を実施
- 9月16日 【ラオス】 郡保健局においてマルチセクター栄養会議に参加
- 9月28日～30日 【ラオス】 食用昆虫養殖パイロット農家フォロー
- 9月28日～30日 【ラオス】 村のリボルビングファンド支援：リフレッシュ研修を実施



## 入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

**法人会員** 年会費：30,000円

**一般会員** 年会費：3,000円

### 【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH  
口座番号 00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

### 特定非営利活動法人ISAPH

#### 【福岡事務所】

〒813-0034  
福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階  
TEL.092-621-8611

#### 【東京事務所】

〒105-0004  
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階  
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail jimukyoku@isaph.jp

URL <https://isaph.jp/>

## ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 医師
理事	渡部 和男	東京理科大学 特命教授
理事	杉下 智彦	東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座 教授
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPHニューズレター 第37号 編集スタッフ】

佐藤 優／乳井 昌史／村上 麻友子／石原 潤子

社会医療法人  
雪の聖母会



## 聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422  
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115  
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設  
(一般病院2〈3rdG:Ver.1.1〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病(後)児保育施設

※本ニューズレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。